

万葉の川心

鳥を詠める歌

横浜市立矢向小学校教諭 澤井園子

(巻第七 一一三番歌)

佐保川の 清き川原に 鳴く千鳥

蛙と二つ 忘れかねつも

締め切り日はとうに過ぎていくのに、ペンが動かない。自然の猛威によって失われた多くの命に対して嘆き悲しむにも、便利な生活の裏にへばりついていた危険の大きさにあまりにも無知であった自分を情けなく思うにも、言葉が見つけられない。「心を一つに」「立ち上がろう」とまちは前へ進む言葉があふれてきている。それなのに、どこが底なのか分からないまま、もがくこともせず、落ちていくような思いが消せない。看護師の資格をもつ友は、じつとしてはいられないと医療ボランティアに旅立った。三回行って帰ってきたときに短く連絡があった。「あまりに悲惨でした。少し休みます。」恩師からは、福島についての詳細なレポートが送られてくる。それを一人何度も読み返す。不思議なもので、仕事が始まる時刻になると、笑顔と元気で、いつものようにどんどん自分の体は動いていく。子どもたちには、少しでも安心をもたらしたい。いつもの変わらない日常をとがんばる。すると、心はパランスをとるように、そこにじつとしていて。そして、奥底で、自分には何ができるのか、何をすべきなんだろうかとくり返しくり返しつつぶやいている。

奈良市北部を流れる佐保川のほとりを歩いていると、川路桜保存会のこんな看板があった。「川路桜 この桜の巨木は、今から百六十年ほど前に植えられたと思われます。(中略) 台風や水害の嵐を乗り越えて、今もなお



その優勢を保ち、美しい花を咲かせています・・・」万葉集での蛙は、「かへる」と読むことはなく、「かはづ」と読み、「かじかがえる」の雅語(洗練された言語)とも言われる。溪流に棲み、当時は、澄んだ美しい声で鳴くことで喜ばれ、万葉集には二十首近く詠まれている。一方の千鳥は、その多くが渡り鳥のことである。「かはらちどり」「かはちどり」という呼び名もあり、ほとんど鳴き声のことで登場する。清い流れに鳴き、夜に鳴き、恋しい人へ心がひかれて、そのあとを追いたくなるような思いが広がっている。この二つがどうにも忘れられないという。

奪うのも自然、励ますのも自然。アスファルトから顔を出す小さな花に心を打たれたりもする。同時に、命をつなぐのも米、肉、魚、野菜他があつて、それを食べてこそ生きていける。当たり前のことをもう一度見直し、風がやみくもに運ぶ批評にあたつても、自分で判断する力が、今、一人ひとりに迫られている。一見どうにもならないようなどん底を、自分事として受け止め、未来に目を向けることを迫られている。一生をかける宿題が与えられた。何世代にも渡る宿題かも知れない。難しくても解かねばならない。その解き方がそれぞれの生き方になるだろう。

川の清らかな流れは、いつまでも止まらない。森の恵みを抱いて、低い方低い方へと選んで流れる。他からの流れを拒むことなく受け入れて、ふところを広くし、清らかに流れ続ける。揺るがぬものを持ち、同じように一滴から始めよう、この一步を踏み出そうと思う。